絵画と出会う「この一点!」

潮隆雄《天空へのいざない》 2006（平成18）年
個人蔵

★小企画展　潮隆雄タピスリー近作展　1990−2010　　会期：9月25日（土）〜11月7日（日）

潮隆雄はタピスリー制作の初期から、確かな織の技術でもって、心象を抽象的な形態の構成に託す独特の作風を築いてきたが、近年は具体性をもった形象を主軸にして作品を構成することが多い。

ここに紹介する《天空へのいざない》のモチーフとなっているのは、観賞用の柑橘類の一種で、新年の縁起物として目にすることの多い仏手柑である。

特徴的な仏手柑の形状（潮はそれを「人間の想像を超えた面白い形」「神の仕業を思わせる」などと語っている）がシンプルな形態に還元され、織特有の質感、色彩をともなって見る者にせまってくる。

潮が長年取り組んできた抽象的な形態による巧みな造形と、近年の作品に共通して内在する、自然の有する生命の力への賞讃というテーマが、高度で独創的な織の技術によって表現された、この作家にしか為し得ない秀作といえよう。

仏手柑をモチーフとする構想は早くからあったというが、制作の前年に帰郷して改めて田辺市内の農家でスケッチをとり、その印象をもとに完成されたのがこの作品である。

（学芸員　三谷　渉）

田辺市立美術館へのきもち④

私は「絵かきの家」に生まれましたが、「画家」にはなれず、時代の流れのままに臨時教員として、スタートいたしました。そんな中でも、絵を描くことは好きでしたし、「絵かきの子が、絵が下手では恥ずかしい」という思いが強かったことを覚えています。叔父ふたりも画家でありましたから、なおさらです。私の教員時代は、小学校勤務2校16年・市教委指導室14年・小学校校長3校11年、この間、自身に課した研究の主題は「子どもが生きるということ」と「美術における自己表現」といったところだったでしょうか。従って、絵を描くことも大切な勉強の一つでありました。私には絵の師匠はおりません。しいて言えば、私の家にも私の脳裏にも父とふたりの叔父の絵がありましたから、自然に感化・影響されたことでしょう。一方、田辺美術協会には草創期から会員の一人として参加しておりました。

その後、田辺市立の美術館が設立されました。その作品収蔵の目玉の一つに、叔父勝四郎の絵が選ばれていたことは親族の一人としてこの上ない誇りであり喜びでありました。美術館に足を運び、勝四郎の絵をまえにしたとき、なんともいえない懐かしさと、見慣れているはずなのに、とても新鮮な魅力を感じるのはなぜでしょうか。また先般、本にまとめきれないままになっていた膨大な「勝四郎の滞欧日記」を美術館で予算化し、館内作業を通して、本に纏め上げ発刊されました。更には、従兄弟の陽子が手持ちの勝四郎の全作品を市に寄贈し、まとめて管理いただくことになったと聞き、本当によかったと安堵いたしました。親族としては、ただ感謝のほかありません。また、隣接町村との合併の結果、田辺市は二つの市立美術館を持つことになりました。これは、他にあまり例を見ないことで、文化都市としての象徴でもあります。それぞれの個性ある豊かな運営・活動が更に期待されるところです。

今、美術協会に所属している立場からいえば、全国的なよい作品を紹介いただくことは勿論歓迎ですが、更に地域作家の作品収蔵の枠を広げ、掘り起こし、その作品資料の調査保存・紹介を大切に……と考えます。これには、収蔵庫の増築や職員の増員などを必要とするでしょうが、時の流れの速さから考えるとき、急がれるべきことではないでしょうか。また、美術館は市内の美術関係者・機関との連携を図り、更なる発展への核となって進まれては如何かと……愚考いたしております。どうかよろしく……。

（田辺美術協会　代表　原　昌也）

美術館あれこれ⑩

絵画の寸法 〜洋画〜

よくお客様からこういう質問を受けます。「この作品、○○センチ×○○センチってあるけど」「はい」「これって何号？」・・・縦何センチ、横何センチの方が分かりやすいような気がするのですが、この質問をされるお客様はご自分で絵を描かれる方が多いようです。

つまり、号数というのはカンバス（キャンバス、canvas、画布とも）や額縁の規格サイズを表す数字で、絵を描かれる方は画材を選ぶ時に使うこの寸法の方が大きさのイメージがし易いのでしょう。

明治時代に西洋絵画と技法が流入してきた時にこの「号数」表記も使われるようになりました。ただ、当時の日本ではまだ尺貫法による尺寸表記が一般的であったため、流入時の1号の寸法:22.0cm×16.0cm（フランスサイズといいます）は尺貫法による近似寸法の22.1cm×16.6cmで表されました。

また、号数表記の基準には長辺の寸法を基準とした規格サイズがあり、F·P·M·Sのアルファベットで表されます。FはFigureの略で、人物像に適した比率と言われており、一番一般的なサイズです。PはPassageの略で、風景画に適した比率、MはMarineの略で、海景に適した比率、SはSquareの略で正方形、縦横が同じサイズのものを指します。

（主任　辰巳　充）

田辺市立美術館NEWS **ORANGE Vol.13**

編集・発行：

田辺市立美術館
〒646-0015　和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770　FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館
〒646-1402　和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390　FAX.0739-65-0393
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

発行年月日：平成22年10月1日

編集後記

この夏は各地で連日最高気温更新のニュースが伝えられるなど、非常に厳しい暑さとなりましたが、展覧会、コンサートやワークショップには、酷暑の最中にもかかわらず多くのお客様にお越しいただきました。この場をお借りして、御礼申し上げます。

ヴァイオリンの生演奏や、講師の先生の作品制作にスタッフとして真近で接することができ、私自身にとっても貴重な経験となりました。

涼しくなる（なってほしい）秋以降の展覧会やイベントにも、また是非お越しください。

（本館 M.M.）

ORANGE

田辺市立美術館NEWS
Vol.13

野長瀬晩花《スペインの田舎の子供》　1924（大正13）年頃

作品紹介　野長瀬晩花《スペインの田舎の子供》　熊野古道なかへち美術館蔵

国画創作協会創立4年目となる1921（大正10）年、野長瀬晩花は会の仲間である土田麦僊、小野竹喬とともに、黒田重太郎の案内で初めてヨーロッパに渡りました。当時、日本画家がグループを組んで渡欧するのは極めて異例のことでした。滞欧中はパリを拠点にスペイン、イギリス、ドイツを歴遊し、この経験から西洋絵画の筆法を用いて丹念に描かれた二曲一隻屏風《スペインの田舎の子供》を制作して、帰国後の1924（大正13）年に開かれた第4回国画創作協会展に出品しています。以後、ここに見られるような子どもたちが並ぶ図を晩花は繰り返し小作品や素描に残しました。滞欧時の記録『欧州芸術巡礼紀行』（黒田重太郎著／1923年刊行）にも《西班牙の児ども》として4人の少女たちが横に並んだ挿絵が付されています。

（学芸員　山本　泰代）

二度目の原勝四郎展にむけて

当館では開館間もなくの1997（平成9）年2月から3月にかけて特別展「原勝四郎展」を開催しました。 これは当館では一人の作家に焦点をあてて開催する展覧会の最初となるものでした。

当時の調査段階では、まだ制作年の特定、推定をすることが難しい作品も多く、生涯にわたっての画業を充分に把握できていなかったために、原の残した作品のモチーフに注目して展覧会を構成し、その芸術を再確認する内容としました。 薔薇を主とする静物画、家族の肖像、自画像、裸婦に限定される人物画、そして原の制作の中心となった風景画の三つに大きく区分し、約50点の油彩画を出品しました。 それぞれのセクションで制作の変遷を追い、水彩画や素描もあわせて展示しました。

当館が作品の収集に重点をおく作家の芸術を紹介するという点では充実した内容でしたが、やはり原勝四郎という一人の画家の制作の軌跡を追って、その芸術を俯瞰して考察する展覧会の開催の必要も強く感じました。 また特に戦前の作品については、残念ながら経年の劣化によって、その真価が損なわれているように思うものも少なくありませんでした。

上記のような課題をかかえつつ、その後も調査を継続し得たことを館蔵品展や小企画展を通じて発表してきました。

この間2007（平成19）年には、原の長女の夫でジャーナリストだった故池田諒氏が綿密な調査に基づいて書き残されていた「原勝四郎のフランス放浪日記」を活字化して刊行することもできました。 こうした活動を評価していただき、昨年にはご遺族から、大切にされていた作品、素描群を一括してご寄贈いただくことになりました。

今年修復が完了した当館所蔵品　　原勝四郎《風景》1934（昭和9）年

当館としても、これまでに蓄積してきた成果を広く紹介し、記録する良い時期に来ていると考え、来年2月から13年ぶりに特別展を開催して原の芸術の再評価につなげることを決定しました。

課題の一つであった作品の修復についても、当館の収蔵品ばかりでなく、ご所蔵家の方々のご理解もいただくことができて、現在作業が進行しています。 二度目の特別展を新たな原勝四郎像の構築の契機にしたいと考えていますので、ご期待ください。 そしてぜひ多く方々にご来館、ご鑑賞いただきたく思っています。

（学芸員　三谷　渉）

INFORMATION

★特別展：「原　勝四郎展」
会　期　／　平成23年2月11日（金・祝）～3月21日（月・祝）
休館日　／　毎週月曜日（但し3月21日は開館）
観覧料　／　一　　般：600円（480円）
大学・高校生：400円（320円）
中学生・小学生：200円（140円）
（　）内は20名以上の団体料金です。
土曜日は中学生・小学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料です。

田辺市立美術館（本館）の改修工事が終りました

改修工事の完了した入り口付近

本年4月から6月までの3ヶ月間、田辺市立美術館（本館）は休館して、玄関前の階段付近と空調設備の改修工事を行いました。 皆様にはご迷惑をおかけしましたが、おかげで工事は無事に完了し、特別展「海を想う」も7月19日から予定通りに開催することができました。

玄関周辺の美観と安全性の向上は、ご来館いただいた際にすぐにお気付きいただけるかと思います。 また空調設備の改修によって、作品の劣化を防ぐために美術館には不可欠な、収蔵庫・展示室の温度・湿度を一定に保つ機能（通年22℃±1℃・RH55%±5%）も一段と高まりました。 エネルギーの使用効率にも配慮しています。

今後とも、一層快適で安全に美術館をご利用していただけるよう努めてまいりたいと思います。

（館長　井口　富夫）

展覧会紹介

田辺市立美術館

★館蔵品展:文人画館蔵作品展 —玉洲と介石

会期 前期:平成22年11月20日（土）～12月19日（日）
後期:平成23年 1月 6日（木）～ 1月30日（日）

桑山玉洲《秋景山水図（野呂介石賛）》　田辺市立美術館蔵

江戸時代中期以降、文人画が我が国の画壇の中で隆盛を極めるなか、多くの画家たちはその山水表現の一つとして「真景」を描くことを重要視していました。 なかでも近世日本文人画壇において、紀州の両雄としてその名を轟かせた桑山玉洲と野呂介石は、ほぼ同じ年に生まれ同じ時代を生きたにもかかわらず、目指した「真景山水」の描き方は対極にあるといっていいものでした。

本展覧会では、それぞれの作品から画業や画風の違いなどを紹介するとともに、二人が生きた時代や画友たち、互いの関係などにもスポットをあてて紹介します。

（主任　辰巳　充）

熊野古道なかへち美術館

★館蔵品展:渡瀬凌雲展—南画家の展覧会

会期 前期:平成22年10月9日（土）～11月28日（日）
後期:平成22年12月11日（土）～平成23年1月23日（日）

渡瀬凌雲《磨崖》　1946（昭和21）年　熊野古道なかへち美術館蔵　第1回南画院展に出品

幼い頃から画才を認められ、展覧会への出品や個展を10代から始めていた渡瀬凌雲ですが、作品の真価が認められ広く名が知られるようになったきっかけは29歳の年、第14回帝国美術院展に入選した《采藻》がドイツの建築家ブルーノタウトの賞賛を得たことでした。 数々の展覧会に出品を繰り返し、その経験から多くを学んだ凌雲にとって、展覧会とはどのような意味を持つものだったのでしょうか。 本展では、凌雲と、同時代に切磋琢磨した南画家たちにとっての展覧会について考察します。

（学芸員　山本　泰代）

REPORT【「海を想う展」コンサート】

【日時】8月1日（日）　18：00～19：30　【場所】田辺市立美術館

特別展「海を想う～海に魅せられた画家たち～」の関連企画として、松田淳一さん（ヴァイオリン）と松田淳子さん（ピアノ）ご夫妻の演奏による海をテーマにしたコンサートを開催しました。

演奏会は淳一さんが選んだ本展出品作品をプロジェクターで投影しながら、作品にちなんだ楽曲を淳子さんの伴奏とともにヴァイオリンで披露、淳一さん自身の解説も交えながら皆さんに鑑賞していただきました。 プログラムには楽器博物館から借用したステッキヴァイオリンやストローヴィオラの演奏もあり、後半ではお越しいただいた皆さんにも歌やワイングラスを使用して演奏に参加いただくなど、夏の夕暮れのひとときを楽しく過ごしていただきました。

（主任　辰巳　充）

演奏中の松田夫妻

REPORT【ひつじの森へ—熊澤明子ワークショップ】

【日時】8月21日（土）・22日（日）　13：30～16：00
【場所】熊野古道なかへち美術館

特別展「森の記憶-熊澤明子テキスタイルの世界」にあわせ、アーティストの熊澤明子さんの指導で2種類の小さなフェルト作品を作るワークショップを開催しました。 ガーゼに羊毛を絡めていく平面作品では自分の記憶に残る色や思い出の景色を表現し、もう一つ立体の作品として、カラフルな羊毛を巻きつけたオリジナル鉛筆を作りました。 年齢も様々、男女入り混じって夢中で制作した2時間はあっという間に終了。 50色以上揃った羊毛から思い思いの色を組み合わせ、配色も形も仰天の楽しい作品が沢山出現しました。 ワークショップの後、再度展覧会を鑑賞する参加者の間から「最初の印象と作品が違って見えるねー！」という声が聞こえてきました。

（学芸員　山本　泰代）

羊毛を使った作品を制作中の参加者と指導する熊澤さん

REPORT【博物館実習・地域社会体験研修】

【日時】8月2日（火）～7日（土）/25日（水）～26日（木）　9：00～17：00
【場所】田辺市立美術館

美術館では実習、研修などの受入れも行っています。 今年度はこれまで8月に実習、研修それぞれ1件を行いました。

8月の第1週には大学4年生1名の「博物館実習」を実施しました。「博物館実習」は学芸員の資格を取得するための必須科目で、それまでに積み重ねてきた大学での勉強の集成を実際に博物館（美術館も博物館の一種です）に出向いて行うものです。 当館の指導にも熱が入ります（右の写真）。

8月の第4週には採用から2年目となる小学校教員1名の「地域社会体験研修」を実施しました。

短い期間でしたが、美術館のスタッフが行っている日常の業務を、一通り体験しながら知っていただきました。 当館の活動に理解を深めていただくとともに、こうした研修の機会を通じて、地域の教育機関相互の連携を進める基盤が形成されるようにしたいと思っています。

（学芸員　三谷　渉）

学芸員の指導を受けながら作品の取扱を行う大学生